

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	病院救急車を使用した町田市医師会の取り組み
演者名	五十子桂祐 1) 川村益彦、栄山雪路、西嶋公子 2)
所属	1) 町田病院 2) 町田市医師会

目的

町田市は、神奈川県と隣接した地域の特異性もあり、市内の在宅療養患者が、遠方の病院へ入院になる事例も少なくない。また東京消防庁の市内の救急出動件数も年々増加傾向にあり、職種を超えた連携強化をはかる必要性がある。よって、東京消防庁の救急車の適正利用も考慮し、在宅療養患者に対し、病院所有の救急車を使用する事により、市内完結型の医療を試みた。

実践内容

市内で救急車を保有する病院間で協力し、月曜日から金曜日までを各病院で振り分け、市内において、一般病床の届出のある病院を協力医療機関とする。また、“かかりつけ医”から患者(またはその家族)に説明、同意を文書にてもらったうえで、在宅療養中に患者の病態が増悪した際、あらかじめ患者が希望した病院へ搬送し診断治療が出来るような運営方法を試みた。

実践効果

患者(またはその家族)に対し、“かかりつけ医”から説明、同意を得るが、“かかりつけ医”の負担が増大しないような配慮が必要であった。また、搬送する職員に対して、定期的な搬送における研修が必要であり、研修を行わないとストレッチャーの操作など、医療上に限らず、搬送の安全性に問題が生じた。

考察

本事業自体が、初めての試みであり、施行するたびに様々な問題点が出てくる。今後、救急車を保有する病院間同士は当然のことながら、“かかりつけ医”も交えた定期的な意見交換会を行い、臨機応変に運営方法の見直しが必要と思われる。また、柔軟な運営にすることによって、近い将来に予想される地震等を含めた災害時などにも、本事業の運営を応用していきたい。